

2018年度の主な新聞記事 等

ヨミダス歴史館 読売新聞 2019年2月24日 朝刊 33 ページ [滋賀]

龍谷大学 2019年3月8日 09:24

山あいの暮らし体験

高島 龍谷大生、丸太割りなど

龍谷大の学生15人が23日、高島市今津町の山あいの集落で、炭焼きのための丸太割りや豆腐作りなどを体験した。

同大ボランティア・NPO活動センターが春休みに実施している体験学習プログラムの一つで、人と自然のつながりを学ぶのが狙い。

一行は22日、3泊4日の



丸太を割り、炭の材料を作る龍谷大生（高島市で）

日程で高島入りし、マキノ高原でスノーシューをはい

東日本大震災の被災地復興にも関わる堺市の2年辻翔太さん(20)は「僕らには

て自然観察をするなどエコツーリズムを体験。2日目のこの日は、地元の人や地域おこし協力隊員の指導で、丸太にくさびを打ち、それを木づちでたたいて割って炭の材料にする方法などを学んだ。過疎高齢化が進む集落の人々の仕事や暮らしぶりに触れ、まちおこしを考えるヒントにするという。

魅力的な雪が、地元の人には生活の障害と映るように、物の見方の違いに気づかされた」と話していた。

(C) 読売新聞社 無断転載・複製禁止。放送、出版等での二次利用の際は読売新聞知的財産担当 (mail: t-chizai06@yomiuri.com tel:03-6739-6961) まで。

2019年 2月24日 読売新聞 提供

ヨミダス歴史館 読売新聞 2019年3月7日 朝刊 33 ページ [滋賀]

龍谷大学 2019年3月8日 09:19

学生が支援活動報告

龍谷大犠牲者追悼の法要も

震災8年

東日本大震災から11日で8年を迎えるのを前に、大津市の龍谷大瀬田キャンパスで6日、被災地での支援活動の報告や犠牲者を追悼する法要が営まれた。

同大学は東日本大震災が起きた2011年から、宮城県石巻市でボランティア活動を実施。学生20～30人が年に2～5回、伝統行事の灯籠流しを手伝ったり、地域を清掃したりして被災者と交流し、15年からは福島県の現状を学ぶ「スタディツアー」も行っている。この日は、農学部1年大



被災地での活動を報告する大屋さん（大津市で）

屋晴太郎さん（19）が、今年2月に赴いた福島県浪江町などでの体験談を披露。「街の復興は進まず、風評被害も完全にはなくなっていない。真の復興とは何かと考へ込んだ」と述べた。つらい体験を学生に話す被災者の心情をおもんばかり「『こんな苦しみをもう味わってほしくない』との思いで話してくださる。震

災は過去の話ではなく、今の私たち全員が向き合う問題。皆が考えることで被災地復興や今後の減災につながる」と思いを語った。報告に先立って法要も営まれ、学生や職員ら約40人が念仏などを唱えて震災犠牲者を悼んだ。

(C) 読売新聞社。無断転載・複製禁止。放送、出版等での二次利用の際は読売新聞知的財産担当 (mail: t-chiza106@yomiuri.com tel:03-6739-6961) まで。

2019年 3月 7日 読売新聞 提供

児童ら 災害備え学ぶ

地域住民が災害時の備えについて楽しみながら学ぶイベント「そなえパークの日 2019」が10日、大津市瀬田南大萱町の県営ひわこ文化公園で開かれた。小学生らが古紙を使ったスリッパ作りやロープ結びなど、災害時に役立つ実践法

古紙スリッパ作りなど体験 大津

を体験した。東日本大震災を機に毎年行っている。同公園の指定管理者の近江鉄道ゆぐループが主催し、2団体がブースを出展した。ボランティア活動に取り組む龍谷大の学生は、新聞紙を利用したスリッパの作

り方を伝えた。地震で家のガラスが割れ、破片が飛び散った床を歩く時に役立つという。部屋が煙まみれになったら、どうやって逃げる? など、防災に関するクイズのコーナーも設けた。瀬田地域のボイスカウトは、人命救助の際に使わ

(中塩路良平)



大学生に教わりながら古紙でスリッパを作る児童(大津市瀬田南大萱町ひわこ文化公園)

福島に行って 見つめる

梨農家の女性から除染などの話を聞きながら
メモを取る大学生たち。2月20日、福島市、
ボランティア・NPO活動センター提供



龍谷大生が被災地訪問ツアー

龍谷大（伏見区）のボランティア・NPO活動センターは2016年から、東日本大震災と原発事故の被害にあった福島県を訪れて住民から話を聞く「福島スタディツアー」を開いている。今年2月19日から4泊5日で15人が回り、あらためて自分たちができることは何かを考えた。11日、東日本大震災の発生から8年になる。

ツアーでは、福島市の梨農家を訪ねて除染の話聞いた。参加した学生たちは、帰還困難区域を除いて避難指示が17年3月に解除された浪江町を歩いた。高校生や福祉施設、ビジネス支援会社で働く人たちの

「震災考え続け、伝えたい」

一人ですべて参加した2年生の村井伶至さん（20）は、友人から「福島に興味がないから行こうと思わな

い」と言われた。そんな人には「福島のご飯がおいしかった。すごかった」と伝えることから始めようと考えている。「根拠、知識をもって説明するのが自分の

課題だ」と話した。このツアー以外にも、福島を訪れてきた4年生の西山大樹さん（21）は、学習会のあと大学であった追悼

に受け止めている。同じ時代を生きて人として知って考えてほしい」と語る。学生たちは今後、活動内容をまとめて報告会を開く。

先でのいじめや、大型スパーの開業によって、先に再開していた個人商店が苦境にあることを知った。現地の人から「頑張れの言葉がづらい」と聞いて言葉の重みに気付いた。「また福島を見に行かないといけな

い」ある学生は「福島から帰って来たら、遠い町だと思ってしまう」と明かした。2回目の参加だった3年生の米本圭吾さん（21）は「現地で起きたことをみんなに知ってほしいけど、どうせ無理かなという感情もある。諦めの心に勝てるようにしたい」。

引率した社会学部の筒井のり子教授（地域福祉論）は「悩みながらも真摯に受け止めている。同じ時代を生きて人として知って考えてほしい」と語る。学生たちは今後、活動内容をまとめて報告会を開く。

© 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

2019年 3月11日 朝日新聞 提供